



1か月間、5時46分を指したまま止まっていた天文科学館大時計

被災状況



かなりの重量がある望遠鏡の転倒が揺れの激しさを物語る

天文科学館

平成7年(1995)1月17日午前5時46分。地震発生時刻で止まった天文科学館の大時計。

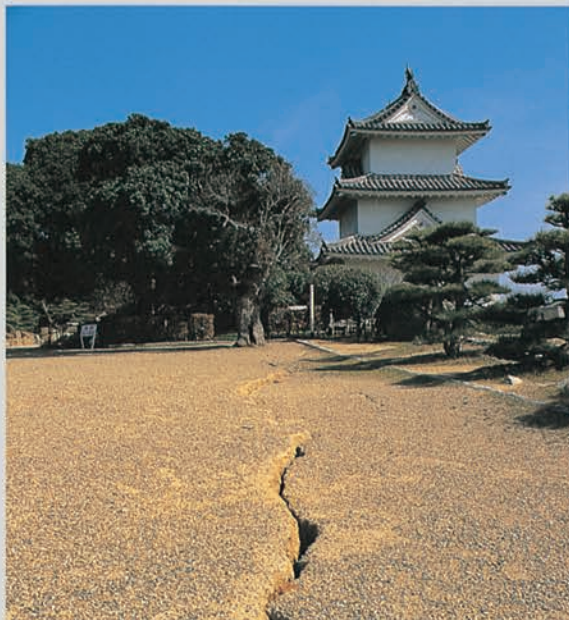
地域の人や同館南側を走る電車の乗客が、毎日楽しみのように眺めていた、日本標準時を刻む大時計は、地震を境に惨事を伝える象徴となったのです。

しかし、その後の天文科学館再開への道のりは、市民の願いに後押しされるかのように着実に進められました。地震の象徴は、時間の経過とともに、復興の象徴へとなっていました。



天井や壁が崩れ、鉄筋がむき出しになったらせん階段





明石公園

薫る緑がやすらぎを与え、2つの櫓が歴史を伝える明石公園は、訪れる市民の心を和ませてくれます。

100年以上の歴史が刻まれた、この市内最大の憩いの空間も、約20秒というわずかな間に、無残な傷痕を負わされました。市街地を見下ろすようにそびえ立つ両櫓や美しい曲線を誇っていた石垣が、一瞬にして壊されたのです。

地面を2つに割るかのような亀裂

石垣が崩れ落ちた外堀





6

教育施設

素直で、時に揺れ動く子どもたちを、いつも変わらず迎え入れていた学校が——。

元気な声がこだまする、子どもたちの大好きな教室、体育館、運動場の傷は、どれほど深く子どもたちの心を傷つけたか、大人では計り知ることもできません。それでも、子どもたちはお互いに励まし合って、一生懸命に悲しみを乗り越えようとしてきました。こんな子どもたちのけなげな姿が、復興を陰で支えていたのかもしれない。

また、市立図書館や文化博物館の復旧のための休館で、平穏な暮らしの中で文化を享受できることのすばらしさを改めて考えさせられました。



市立図書館

文化博物館







周囲の塀が崩壊した本松寺(上ノ丸1丁目)

倒壊建物

地震発生直後、阪神地区や淡路島の被害が想像を絶するほど壊滅的であったために、明石の被害状況が全国に伝えられることはあまりありませんでした。しかし、市民からの通報や市職員らによる家屋調査などで、刻々と被災状況が明らかになり、被災世帯は、全壊4,239世帯、半壊10,957世帯、一部損壊35,618世帯と、市内全世帯の約半数にあたる5万世帯以上にも上りました。

明石市内の家屋の被災は、阪神間のように目に見える形になりませんでした。建物の外観は保たれているものの、内部や基礎は外観からは見当もつかないほど損壊していたというのが、明石の被災家屋の特徴でした。

路上にまで倉庫内の積み荷が飛び散った(西新町1丁目)





暮らし

家が壊れる、水、ガスが出ない、交通手段が閉ざされる。突然襲った恐怖と不便な生活で路頭に迷いながらも、被災した市民は、一日一日を懸命に生きていました。

1月17日当初から市が開設していった避難所は28か所、1日の最大収容人数は3,369人に上りました。市は、避難所に食料や毛布などの生活用品の供給に加え、体力の消耗が心配された高齢者や障害者、乳幼児の健康状態の把握にも努めました。

「一刻も早く、好きな物を食べ、お風呂に入りたい」。被災した市民が望んだのは、地震発生まで当たり前のようをしていた事でした。



臨時給水場では水を求める市民が途絶えなかった(市役所)



ガスが出ない市民にカセットコンロを配布(市民会館前)



西施



復旧

「暮らしに平穏が戻るのはいつの日か」。毎日毎日、そんな思いを抱えながらも、パニックに陥ることなく冷静さを保った市民の行動が、各方面での復旧を助けてきました。市も、日ごとに進む水道復旧の一方で市内の学校などに臨時給水場を設けたり、予想以上の被害で困難を極めたガス復旧工事中にカセットコンロを配布するなど、復旧作業の側面支援を続けました。さらに、いち早く実施した、がれき回収や震災によるごみの受け入れには、「まちの傷痕だけでなく、沈んだ気持ちも和らいだ」といった声も寄せられました。

ガス復旧工事(大明石町2丁目)

がれき回収作業(大蔵天神町)





市役所には全国から救援物資が届けられた



明石市バスは神戸市に鉄道の代替運行便を送り、被災者を助けた(長田区)

救援

地震直後から市民や食料品店を営む人たち、あるいは市外から救援用の食料が次々に市役所に届けられました。届いた温かいご飯を、市職員らがおにぎりにし、避難所に届ける、といったリレー搬送が続けられました。

交通では、鉄道の不通を補うべく、明石港から神戸への臨時客船が運航され、通勤、通学の市民の足を守りました。さらに、市バスは、道路損壊や大渋滞という悪条件の中、翌日の1月18日から一部を除いてほぼ平常運行を続けながら、臨時便も運行しました。さらに市バスは、1月末から3月末まで山陽電鉄(東垂水～西代)やJR(住吉～灘)で鉄道代替バスとして、被災地の交通を助けました。



明石港から神戸港へ出航する臨時客船は通勤、通学の貴重な交通手段となった





保健婦らが訪問し、高齢者の健康状態を確認（明石公園）

仮設住宅

家を失った市民が最も望んでいたのは、元の自分たちの家での暮らしだったに違いありません。しかし、家再建のための膨大な費用や再建までの時間を考えると、一時も早く家族で暮らすことが当面の願いだったのではないのでしょうか。

市は、市営、県営、公社、公団住宅など131戸の仮住宅を確保するとともに仮設住宅の建設に着手しました。1月29日午前から中崎1丁目のテニスコートで工事を始めたのを皮切りに、市内13か所で856戸を建設しました。また、仮設住宅への入居が始まった直後から、市と医療、保健、福祉の各機関が連携して「仮設住宅ケアネット」を組織し、高齢者や障害者の支援に取り組みました。



急ピッチで建設が進められた（藤が丘2丁目）





友だちとおこづかいを出し合い、義援金を届けてくれた小学生たち
(市役所)

ボランティア

6,400人を超える死者を出し、都市の機能を奪った兵庫県南部地震。癒されることのない大きな悲しみの中で、被災者に希望の灯をともしたのがボランティアでした。地震直後から、大勢の人がボランティアとして駆けつけ、被災地での支援活動に携わりました。明石市でも延べ3,400人が様々なボランティア活動を展開し、被災した市民を勇気づけました。

また、小学生から高齢の人まで多くの人たちが、少しでも被災者のために役立てて欲しいと、義援金を届けに次々と市役所を訪れていました。

温かい食べ物に思わず笑みが(大蔵中町)

